國學院大學学術情報リポジトリ

・第３回「渋川春海の垂加神道・吉川神道への批判と国学者への影響」

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000543

平成30年度第３回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「渋川春海の垂加神道・吉川神道への批判と国学者への影響」要旨

渋川春海（以下、春海と記す）は、貞享改暦を行った人物として歴史に名を残した。貞享暦は、貞享２年（1685）から施行され、823年間続いてきた宣明暦の時代を終わらせた。改暦は、会津藩主であった保科正之の命によった。家綱政権の中枢にいた保科は、朱子学を学び、武威による政治ではなく、教養と文化による仁政の実施をめざした。殉死の禁止、大名証人制の廃止、末期養子の禁の緩和、諸社禰宜神主法度の公布などを保科は実行し、会津藩内では社倉制、神社改めなどを行った。保科が改暦を命じたのは、政治の一環であった。中国では天文観測と暦作成は、皇帝の専権事項であって、保科はそれに倣ったと考えられる。保科のまわりには知識人が集うサロンがあり、春海はその一人であった。保科は改暦を春海、山崎闇斎、安藤有益、島田覚右衛門に命じた[1]。サロンでは、『日本書紀』が読まれ、その講義が行われた。その中心にいた吉川惟足は、儒教の徳目であった仁政は、すでに天照大御神が行っていた、幕府政治は天照大御神の仁政を復古すべきだと説いた。保科、惟足、闇斎が『日本書紀』を読んだのは、復古すべき理想的な社会がそこに描かれていたからであった。

春海には『日本長暦』という著作があった。『日本書紀』では神武天皇東征伝から干支が記されていた。それに気がついた春海は、神武天皇が暦を作成したと推定した。その暦（「古暦」と呼ばれた）は、中国から暦が伝来した後に失われた。復古主義者であった春海は、失われた暦を復元しようと試み、神武天皇の時代から春海の時代までの大小、閏、干支が入った暦の一覧を作成し、それを『日本長暦』と名づけた。神武天皇の時代が地続きに今の時代につながったのである。闇斎が、日本が再び開闢すると言って春海を激賞した。たとえば天照大御神の鎮座の日は、『内宮鎮座御記』では「垂仁天皇二十六年十月甲子」とある。『日本長暦』では、その年の11月には甲子の日はないが、９月にはある。そうだとすると九月甲子を十月甲子の誤記ではないかと春海は考える。九月甲子であれば、９月17日となり、伊勢神宮の新嘗祭の日にあたる。新嘗祭は、実は天照大御神の鎮座を祝う祭祀であったことが判明する[2]。

保科サロンを基盤として貞享改暦、『日本長暦』が誕生したと筆者は考えている。しかし保科の死後、サロンの関係は崩壊した。春海は、保科、闇斎、惟足の葬儀や墓のあり方に対して批判的になった。惟足は吉田神道の継承者であり、吉田神道式に葬儀がなされ、埋葬された。吉川家の敷地内には、惟足の埋葬地があり、その上に社が建てられていた。そこには保科の家臣友松氏興の石塔もあり、春海と谷秦山はそれを見て、「穢らはしきこと也」[3]と洩らした。吉田神道流の埋葬地に社を建てることは、日本の古式に則っていないというのが、二人の見解であった。春海は、陵墓を調査して、古式の葬法を自分なりに発見し、埋葬地と祭るところは別であったと述べている[4]。

春海は、保科や闇斎の葬儀にも不満を抱いていた。保科の葬儀は、会津藩によって大々的に行われ、大きな墳墓が築かれた。闇斎、惟足が、葬儀では中心的な役割を果たしたが、

吉田神道流と儒葬を合わせたものであった。闇斎の臨終と葬儀に関する情報は、闇斎門下に伝えられた[5]。二人の葬儀には儒葬が混じっていたことについて、春海は「恨むべき事万万也」[6]と恨み言を述べた。

『日本書紀』について惟足が講義を行い、保科、闇斎、春海が集った頃のサロンの友愛はなくなり、春海は三人に対して妥協のない批判を加えるようになった。寺請が制度化して誰でもが仏教式に葬られる時代において、復古主義的な神道家は、いかなる葬儀を迎えるべきか。惟足は、幕府神道方になっており、特別に吉田神道流で埋葬されることが許された。保科は会津藩主であり、保科の遺志が惟足を通じて幕府によって追認された。闇斎に関しては、垂加神道門人たちによって儒葬で葬られて、その後に空の棺をもって僧侶による葬儀が執り行われたと言われている。春海によれば、保科では儒葬と吉田神道、闇斎で儒葬と仏葬が混じっていた。儒葬は、新しい葬儀であり古式ではなかった。

ところで春海はどのように葬られるのか。本人は、東海禅寺に葬られた。東海禅寺は、将軍家光が沢庵を開基にして建立した寺院であり、徳川家とつながりを持っていた。幕府天文方の渋川家がそこを菩提寺したことは自然な成り行きであった。あれだけ保科、闇斎、惟足の葬儀や墓地を批判した人が、自らは仏葬で葬られてもよかったのかという疑問は残る。しかし家の確立が、晩年の春海には最重要の課題になっており、東海禅寺での葬儀と埋葬は自明なことであった。ここでは春海の中途半端さよりも徹底ぶりを注目したい。彼は復古主義を葬儀や埋葬にまで徹底させ、古式の埋葬を発見し、それを保科、闇斎、惟足にも伝えたはずである。しかし彼らが、古式を採用せずに、儒葬や吉田神道流という新葬法を採用したことに春海は苛立った。彼らの立場であれば、自らの葬儀の方法を選択できたはずである。初代天文方春海が、幕府から与えられた東海禅寺の葬地に埋葬されたことは当然のことと、本人に認識されたと考えられる。

『日本長暦』は、本居宣長『真暦考』、平田篤胤『天朝無窮暦』にも影響を及ぼした[7]。宣長は春海に言及はしないが、春海の古暦探求という発想じたいが漢心で許せなかった。篤胤は、春海の古暦を自家薬籠中にして壮大な無窮暦を創作した。『日本長暦』は、貞享改暦同様に後世へ与えた影響力は大きかったと言わねばならない。

注

(1) 林淳『日本史リブレット人　渋川春海』山川出版社、2018年、28頁。

(2) 同上、39～40頁。

(3) 「新蘆面命」『日本文庫』第４編、博文観、1891年、48～49頁。

(4) 「瓊矛拾遺」五、『大日本文庫神道篇　垂加神道上巻』春陽堂書店、1935年。

(5) 『闇斎先生易簀訃状』晴心堂、1939年。

(6) 『秦山集』十五、谷干城、1910年。

(7) 林淳「暦と天文」『岩波講座日本の思想４』岩波書店、2013年。

（林淳）